

白土原南遺跡 (第1・2次)

前沢遺跡 (第4次)

阿久遺跡 (第9次)

平成10年度原野圃場整備事業原村
西部地区に所在する緊急発掘調査報告書

2000.8

長野県原村教育委員会

うす っ ぼら みなみ
白ヶ原南遺跡 (第1・2次)

まえ ざわ
前沢遺跡 (第4次)

あ きゅう
阿久遺跡 (第9次)

平成10・11年度県営圃場整備事業原村
西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書

2000.3

表紙地図10,000分の1 ○印が白ヶ原南・前沢・阿久遺跡

序

このたびは白ヶ原南遺跡・前沢遺跡・阿久遺跡の報告書を刊行することとなりました。

発掘調査は、県営圃場整備事業原村西部地区に先立って、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から補助金交付を受けて原村教育委員会が、白ヶ原南遺跡は平成10・11年度、前沢遺跡と阿久遺跡は平成11年度に発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、それぞれの遺跡から縄文時代と平安時代の住居址を発見することができました。国史跡阿久遺跡は、縄文時代前期の遺跡としてあまりにも著名ですが、このたびは平安時代の住居址を数多く発見しております。また、阿久遺跡と白ヶ原南遺跡で発見した平安時代の住居址は、その位置関係から強い関係を持っていたことは容易に考えられ、大集落跡の露呈はあまりにも強烈でありました。調査地はすでに消滅してしまいましたが、遺跡の規模を改めて認識する調査であったと同時に、当地方の平安時代解明にむけての好資料を提示することができたものと思っています。

このたびの発掘にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、柏木区及び同区実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解とご協力、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘に関わる多くの皆様のご協力で深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員 田中正治郎氏、櫻井秀雄氏の多大のご助力、そしてご苦労された作業員の皆様により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

原村教育委員会
教育長 大 館 宏

例 言

- 1 本書は「平成10・11年度県営圃場整備事業原村西部地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する白ヶ原南遺跡（10・11年度）、前沢遺跡（11年度）、阿久遺跡（11年度）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫及び県費から発掘調査費補助金交付を受けた原村教育委員会が、平成10年8月6日から9月30日（白ヶ原遺跡南尾根と呼称し発掘）。平成11年4月19日から11月26日にかけて実施した。整理作業は平成12年1月17日から3月24日まで行った。
- 3 発掘調査の現場における遺構等の実測・記録は、平成10年は、田中正治郎の指導のもと、小林りえ・進藤郁代・津金喜美子・林史子が行い、写真撮影は田中が行った。平成11年は、櫻井秀雄の指導のもと、小林りえ・進藤郁代・津金喜美子が行い、写真撮影は櫻井が行った。
- 4 本書の執筆は櫻井秀雄・会田進・平出一治、編集は櫻井・平出・平林とし美が行った。
- 5 測量基準点設置及び航空撮影・測量、遺構測量の一部については株式会社写真測図研究所に、土器の実測・トレースの一部は株式会社シン技術コンサルに、石器の実測・トレースは株式会社アルカにそれぞれ委託した。
- 6 本調査の出土遺物・記録類はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、前沢遺跡=12、白ヶ原南遺跡=101、阿久遺跡=11の原村遺跡番号をそれぞれ表記してある。
- 7 遺構図における網点は焼土を示している。また土器実測図における断面の黒塗は須恵器を、断面の網点スクリーントーンは灰軸陶器を、内面の網点スクリーントーンは黒色土器をそれぞれ示している。
- 8 発掘調査から報告書作成にわたって、県文化財・生涯学習課の原明芳氏、県埋蔵文化財センターの百瀬長秀氏・白居直之氏・鳥羽英穂氏、県立歴史館の白沢勝彦氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

例 言	
目 次	
I 発掘調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 調査組織	1
3 発掘調査の経過(調査日誌抄)	2
(1) 臼ヶ原南遺跡	2
(2) 前沢遺跡	3
(3) 阿久遺跡	3
II 調査方法	5
1 調査方法と調査区の設定	5
2 土 層	5
3 位置と環境	6
III 臼ヶ原南遺跡	8
1 発見した遺構と遺物	8
(1) 縄文時代	8
(2) 平安時代	30
2 まとめ	34
IV 前沢遺跡	35
1 発見した遺構と遺物	35
(1) 縄文時代	35
(2) 平安時代	42
2 まとめ	42
V 阿久遺跡	43
1 発見した遺構と遺物	43
2 まとめ	43
VI 結 語	47
臼ヶ原南遺跡出土押型文土器観察表	49
報告書抄録	

図 版 目 次

第1図	白ヶ原南・前沢・阿久遺跡と付近の遺跡	7
第2図	白ヶ原南遺跡 発掘調査区域図・地形図及び全体図	9・10
第3図	白ヶ原南遺跡 1号竪穴住居址	8
第4図	白ヶ原南遺跡 1号竪穴住居址出土土器・石器	11
第5図	白ヶ原南遺跡 2号竪穴住居址	12
第6図	白ヶ原南遺跡 3・6・7・9号竪穴住居址、 2・6・7号竪穴住居址出土土器・石器	13
第7図	白ヶ原南遺跡 小竪穴1～4	15
第8図	白ヶ原南遺跡 小竪穴5～10	17
第9図	白ヶ原南遺跡 集石1～7	19
第10図	白ヶ原南遺跡 埋壑1・2、埋設土器	20
第11図	白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影1	22
第12図	白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影2	23
第13図	白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影3	25
第14図	白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影4	26
第15図	白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影5	27
第16図	白ヶ原南遺跡 遺構外出土石器	28
第17図	白ヶ原南遺跡 集石1・遺構外出土石器	29
第18図	白ヶ原南遺跡 4・5・8号竪穴住居址	31
第19図	白ヶ原南遺跡 4・5号竪穴住居址、遺構外出土土器	32
第20図	白ヶ原南遺跡 焼土1～3、焼土1出土土器	33
第21図	前沢遺跡 発掘調査区域図・地形図及び全体図	36
第22図	前沢遺跡 3号竪穴住居址	35
第23図	前沢遺跡 3号竪穴住居址出土土器・石器	37
第24図	前沢遺跡 小竪穴4	38
第25図	前沢遺跡 小竪穴4、遺構外出土土器	39
第26図	前沢遺跡 遺構外出土土器・石器	40
第27図	前沢遺跡 2号竪穴住居址、2号竪穴住居址出土土器	41
第28図	阿久遺跡 発掘調査区域図・地形図及び全体図	45・46

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

平成5年度から実施されている「県営圃場整備事業原村西部地区」も7年目をむかえた。白ヶ原南・前沢・阿久の3遺跡の保護については、平成10年10月27日および平成11年1月27日に、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者の出席のもとで行われた「平成11年度県営圃場整備事業原村西部地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議され、本来遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、原村の農業の将来を考えると農地の整備は必要なことであるうえに、農業者から強い要望もあり、協議の結果、次善の策として「記録保存やむなき」との考えに落ちついた。そして平成11年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

なお、白ヶ原南遺跡は平成10年度に白ヶ原遺跡南尾根と呼称し調査を進めた結果、住居址と小竪穴を検出しその一部を調査したが、その立地から白ヶ原遺跡とは別遺跡であるとの考えに落ちつき、平成11年度は白ヶ原南遺跡と呼称し調査を実施した。

発掘調査は原村教育委員会が、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託と、国庫および県費から発掘調査補助金交付を受けて、平成10年8月6日から9月30日（白ヶ原遺跡南尾根）ならびに11年4月19日から11月26日にわたって緊急発掘調査を実施した。

2 調査組織

平成10年度 前沢・白ヶ原（白ヶ原南）・白ヶ原西遺跡発掘調査団名簿

団 長	大館 宏（原村教育委員会教育長）						
調査担当者	田中正治郎（長野県埋蔵文化財センター・原村派遣）						
調 査 員	平出 一治（原村教育委員会）						
調査参加者	発掘作業	金子 正美	吉川 幸子	久根 穂則	小池 英男		
		小島 政雄	小林 ミサ	小林 りえ	小松 弘		
		五味 元	五味八代江	清水 太助	清水 正進		
		進藤 郁代	田中 初一	津金喜美子	西沢 寛人		
		林 史子	日達今朝江				
事 務 局	原村教育委員会	小林 鏡晃（教育次長）	津金 一臣（庶務係長）				
		戸田 美鈴	平出 一治（文化財係長）	中村 恵子			

田中正治郎（県派遣主事）

平成11年度 白ヶ原南・前沢・阿久遺跡発掘調査団名簿

団 長 大館 宏（原村教育委員会教育長）

調査担当者 櫻井 秀雄（長野県埋蔵文化財センター・原村派遣）

調 査 員 平出 一治（原村教育委員会）

調査参加者 発掘作業 池 冬樹 池 涼子 金子 正美 吉川 幸子
久根 種則 小池 英男 小池 寛司 小島久美子
小島 政雄 小林 りえ 小松 弘 五味 元
五味八代江 清水 太助 清水 正進 進藤 郁代
田中 初一 津金喜美子 西沢 寛人 日達今朝江
横内かおり
整理作業 池 冬樹 吉川 幸子 久根 種則 小島 政雄
小林 りえ 小松 弘 清水 太助 進藤 郁代
田中 初一 津金喜美子 西沢 寛人 日達今朝江
横内かおり

事務局 原村教育委員会 小林 銹晃（教育次長） 津金 一臣（庶務係長）
戸田 美鈴・平出 一治（文化財係長） 中村 恵子
櫻井 秀雄（県派遣主事）

3 発掘調査の経過（調査日誌抄）

（1）白ヶ原南遺跡

第 1 次 調 査

平成10年8月6日 重機にて白ヶ原遺跡南尾根部分のトレンチ調査開始（調査終了後立地を考慮する
中で白ヶ原南遺跡と呼称する）

24日 遺構の検出作業および精査をはじめ。

9月30日 資材の撤収。調査はすべて終了する。

第 2 次 調 査

平成11年4月19日 発掘準備をはじめ。

26日 テントの設営および機材の搬入。重機による表土剥ぎをはじめ。

遺構の検出作業および精査をはじめ。

- 6月3日 重機による表土剥ぎ終了する。
- 7月30日 住居址は黒色土層中に構築されていたため、その下層の黒色土に重機によるトレンチ掘りを行う。
- 8月11日 本日にて調査はすべて終了する。

(2) 前 沢 遺 跡

平成11年4月19日 発掘準備をはじめめる。

- 6月4日 草刈り・調査トレンチの設定を行い、重機によるトレンチ掘りをはじめめる。
- 11日 トレンチ内の精査をはじめめる。
- 26日 住居址の埋没を確認した地点の表土剥ぎを重機ではじめる。
- 7月5日 重機による作業は終了する。
- 8月21日 住居址検出地点の南側は、黒色土層の堆積が厚いため、その黒色土に重機によるトレンチ掘りを行うが、遺構の埋没を確認するまでには至らなかった。
- 10月6日 当初は調査地区外であった畑地が、工事の関係で対象となったため、重機によるトレンチ掘りを行い、住居址の埋没を確認したため引き続き表土剥ぎをはじめめる。
- 7日 重機による表土剥ぎは終了する。
- 14日 工事範囲が不明確であった東はずれのトレンチ掘りを重機で行う。
- 21日 調査は終了する。

(3) 阿 久 遺 跡

阿久遺跡は国の史跡であり、調査の対象は史跡を取り囲む外縁部がその対象で、広範囲にわたったこともあり、便宜的に①南斜面、②北斜面、③中央自動車道西の3地点に分けて調査を進めた。したがって地点別に調査経過を記しておきたい。

① 南 斜 面

平成11年4月19日 発掘準備をはじめめる。

- 7月6日 草刈り・調査トレンチの設定を行い、重機によるトレンチ掘りをはじめめる。
- 11日 住居址の埋没を確認したため、重機による表土剥ぎをはじめめる。
- 8月10日 102号住居址より大量の炭化材が出土し、とりあげに苦慮する。
- 20日 県埋蔵文化財センター白居直之氏に102号住居址の炭化材の指導をうける。
- 9月3日 県立歴史館白沢勝彦氏に102号住居址の炭化材とりあげの際に必要な保存処

理の指導を受ける。

9日 重機による表土剥ぎは終了する。

10月22日 白居氏に102号住居址の炭化材の鑑定をお願いする。

11月18日 ラジコンヘリによる空撮・空測を実施する。

② 北 斜 面

9月26日 重機によるトレンチ掘りをはじめる。

27日 トレンチ内の精査を行うが、遺構を確認するまでに至らなかったため調査は終了する。

③ 中央自動車道西

10月16日 平成12年度に発掘調査予定しているため、遺構の埋没状況を把握するため重機によるトレンチ掘りと精査をはじめる。縄文時代前期土器片、乳棒状石斧、黒曜石剥片、土師器片等の発見がある。

25日 重機によるトレンチ掘りは終了する。

11月26日 今日で全ての調査終了する。

II 調査方法

1 調査方法と調査区の設定

3遺跡とも国家座標第Ⅱ系に合わせた基準杭を数本設置し、Y軸に合わせたトレンチを設定し、重機によってバケット幅(約1.2m)のトレンチを掘削、引き続き人力でトレンチ内の精査を行った。遺構および遺物を確認した時点で、その結果を踏まえて面的調査範囲を決定した。

調査はⅢ層(ローム層)上面までとしたが、南斜面では下部を中心としてⅡ層の堆積が厚くⅢ層上面まで掘り下げることができなかった部分もある。また白ヶ原南遺跡と阿久遺跡の南斜面下部では、当地方でしばしばみられる自然礫の存在が認められた。いままでの調査で自然礫の下層から遺構が発見されることがないため、自然礫を掘り下げることとはしなかった。

面的査区は50m×50mの大グリッド(地区)を設定し、さらにこの大グリッド内を2m×2mの小グリッドに分割してX軸方向に算用数字、Y軸方向にはA~Yの符号をつけた。これにしたがって、白ヶ原南遺跡は、X=-4350.000、Y=-27390.000をC地区A-50グリッド、前沢遺跡は、X=-4050.000、Y=-27560.000をB地区A-50グリッド、阿久遺跡は、X=-4290.000、Y=-27560.000をR地区A-50グリッドにそれぞれ定めた。

調査面積は、白ヶ原南遺跡は平成10年度が2,577㎡、11年度が6,611㎡で、合わせると9,188㎡を数えるが、10年度と11年度で一部重複する箇所(平成10年度トレンチ部分)もある。前沢遺跡はトレンチ調査が3,345㎡、面的調査が1,827㎡の合計で5,172㎡である。阿久遺跡は①南斜面のトレンチ調査が738㎡、面的調査が7,278㎡、②北斜面のトレンチ調査が492㎡、③中央自動車道西のトレンチ調査が1,337㎡の合計で9,845㎡である。

2 土 層

各遺跡とも地点によって土層に差異はあるものの、基本的には以下の通りである。

白ヶ原南遺跡	I層	黒色土(耕作土)
	II層	黒褐色土
	III層	黄褐色土(ローム層)
前沢遺跡	I層	黒色土(耕作土)
	II層	黒褐色土
	III層	黄褐色土(ローム層)
阿久遺跡	I層	黒色土(耕作土)

II層 黒褐色土

III層 黄褐色土（ローム層）

3 位置と環境

3遺跡とも柏木区の西南方に所在する。このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。多くの遺跡はこうした尾根上および斜面に存在している。前沢遺跡は大早川右岸の尾根上および斜面に、一方、白ヶ原南遺跡と阿久遺跡はその対岸、大早川と阿久川にはさまれた尾根上および南斜面に、それぞれ展開しているのである。

次に過去の調査歴について振り返ってみよう。

白ヶ原南遺跡（原村遺跡番号101）は、平成10年度県営園場整備事業原村西部地区にともなって実施した白ヶ原遺跡（原村遺跡番号17）のトレンチ調査で、住居址と小竪穴を検出し、その一部はすでに調査は終了しているが、地形的にみて白ヶ原遺跡と白ヶ原南遺跡は別遺跡であるとの考えに至った。したがって本調査は白ヶ原南遺跡第1次・第2次発掘調査である。

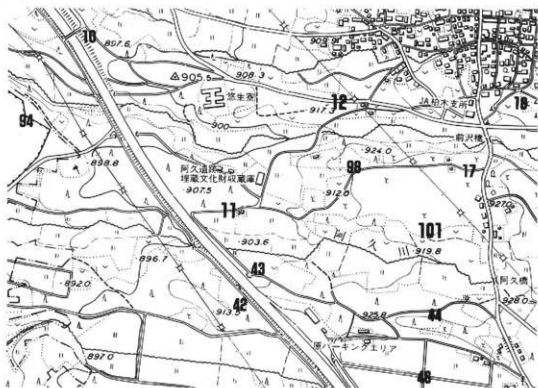
前沢遺跡（原村遺跡番号12）は、過去3回にわたって発掘調査を実施している。第1次は昭和53年に村道改良にともなって実施したが、縄文時代の遺物が出土したにとどまり、遺構は検出できなかった。第2次調査はやはり村道改良と土取りに先立って昭和61年に実施したもので、発見した遺構は、縄文時代早期の小竪穴3基、中期の住居址1軒、近世の墓壇4基があり、遺物は縄文時代早期～中期と平安時代の土器がある。第3次は平成10年に今回と同じ県営園場整備事業原村西部地区にともなって実施したものであるが、近・現代の溜を1基発見したにとどまった。今回が第4次の発掘調査である。

阿久遺跡（原村遺跡番号11）は、過去8次にわたる発掘調査を実施している。第1次～第4次調査は中央自動車道の建設に先立って、県教育委員会が昭和50年から4か年を費やして実施している。昭和50年の第1次調査は範囲確認調査であり、同51年から行われた第2次～第4次調査では従来の考古学上の知見をこえた諸遺構の発見が相次ぎ、全国的な保存運動の結果、中央道の下に埋没保存されることとなった。第5次調査から村教育委員会が実施している。第5次調査は昭和54年に行った「重要遺跡範囲確認調査」であり、その調査の結果55,940.97㎡が国の史跡に指定されている。同54年には保存運動の結果生じた村道改良にともなう発掘調査で、縄文時代中期の住居址1軒と時期不詳の集石2基を発見している。第7次調査は平成5年に実施した範囲確認調査である。第8次調査は平成7年に鉄塔建設に先立って実施したものであり、小竪穴2基を検した。そして今回が第9次調査ということになる。

表1 白ヶ原南・前沢・阿久遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
10	柏木南	○			○	◎					○		昭和51年度発掘	
11	阿久		○	○	◎	◎				◎	○		国史跡 昭和50～53、 平成5・7・11年度発掘	
12	前沢				○	◎				◎		○	昭和55・61、平成10・11 年度発掘	
17	白ヶ原		○	○	○					○			昭和53、平成10年度年度 発掘	
18	前尾根西					○							昭和51年一部破壊	
42	居沢尾根	○	○		◎	◎				◎			昭和50～52・56、平成6・ 11年度発掘	
43	中阿久					○						○	昭和51年度発掘	
44	原山					◎				○			昭和50年一部破壊	
46	宿尻	○	○		◎	◎				◎			平成5・6年度発掘 消滅	
94	下原山					○							茅野市に跨る 平成2・ 3年度発掘	
98	白ヶ原西									○			平成10年度発掘消滅	
101	白ヶ原南		○		◎	◎				◎			平成10・11年度発掘	



第1図 白ヶ原南・前沢・阿久遺跡と付近の遺跡

III 白ヶ原南遺跡

1 発見した遺構と遺物

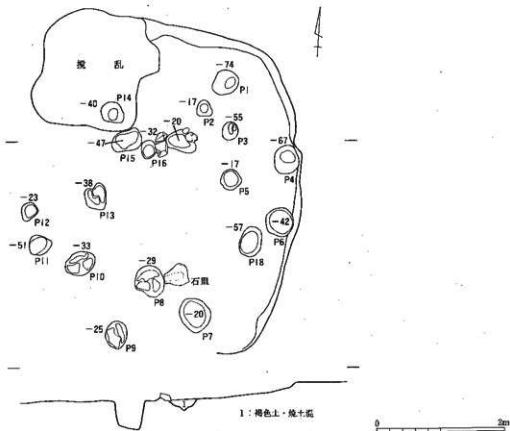
(1) 縄文時代

発見した遺構は、竪穴住居址6軒、小竪穴10基、集石7基、埋甕2である。小竪穴はすべて平成10年度に調査したものである。

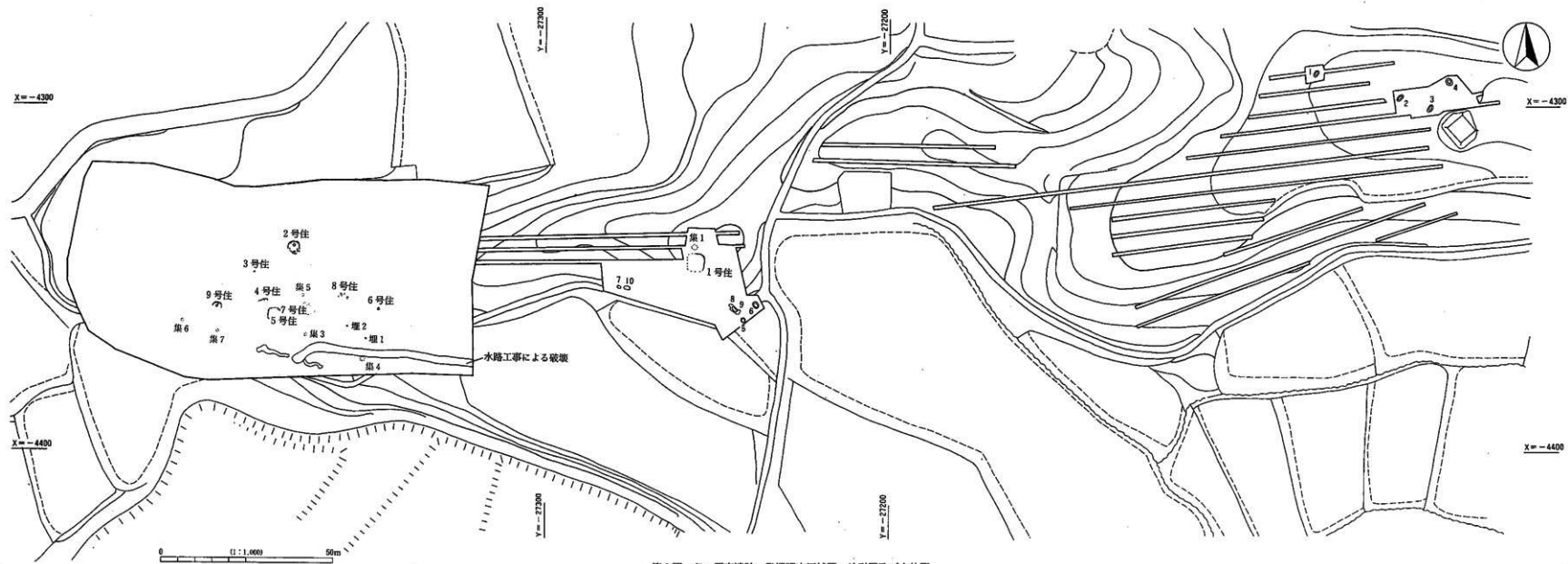
① 竪穴住居址

1号竪穴住居址 (第3図・第4図)

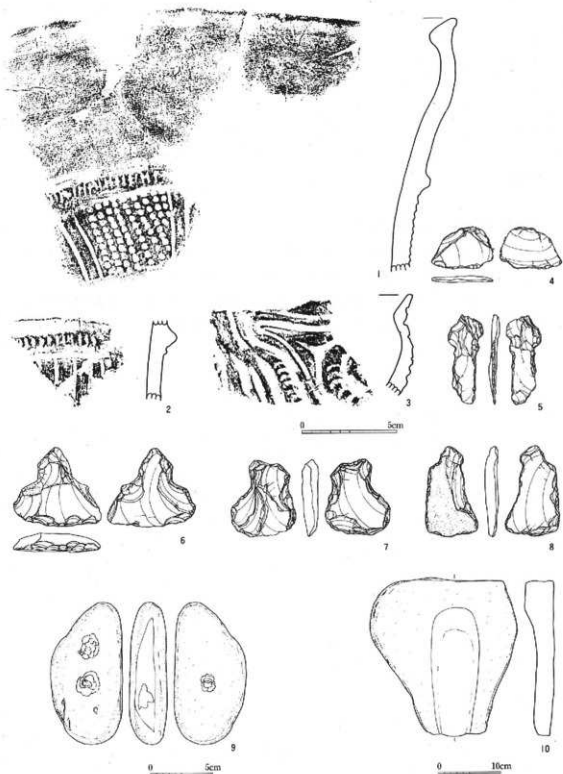
平成10年度に調査した竪穴住居址である。北側は攪乱で一部破壊され、西側及び南側は壁を流



第3図 白ヶ原南遺跡 1号竪穴住居址



第2図 白ヶ原南遺跡 発掘調査区域図・地形図及び全体図



第4图 白ヶ原南遺跡 1号竪穴住居址出土土器・石器

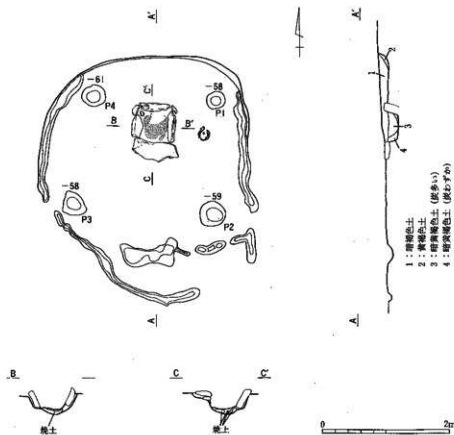
失しているため、規模は推定の域を出ないが、径5m程を測るものと考えられる。炉は中央北寄りに位置する。石囲炉であるが、炉石は完存していない。ピットは16基が認められた。

遺物は少なく、土器は、ビニール袋1つほどにすぎない。第4図1～3の3点を図示したが中期中葉である。

石器は、第4図5の砂岩製の削器、5～8の粗製石匙は4点あり、5は片岩製、6～8は砂岩製である。9は当地方で産出する安山岩製の凹石で、右側面に磨りが見られる。10はやはり安山岩製の石皿で、P8脇の床面に伏せられていたものである。このほか図示しなかったが打製石斧の欠損品等がある。

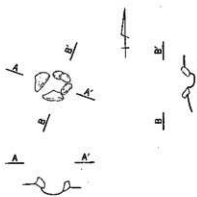
2号竪穴住居址 (第5図・第6図)

CF-56～CH-54グリッドに位置する。平成10年度のトレンチ調査によってその存在が知られていた竪穴住居址である。Ⅲ層上面で検出した。南斜面に位置するため、南側の壁はすでに流失していた。周溝の位置から規模を推測すると、4×3.4m程のやや南北に長い不整形円形を呈するものである。覆土は2層に分けられる。炉は石囲炉で中央やや北寄りに完存していた。炉内の覆

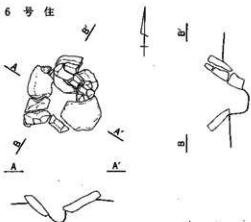


第5図 白ヶ原南遺跡 2号竪穴住居址

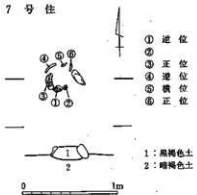
3号住



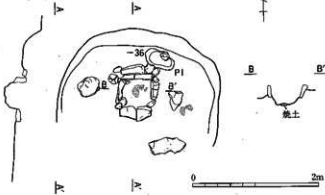
6号住



7号住



9号住

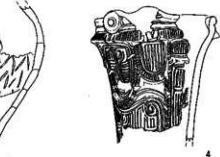
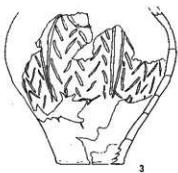


- ① 逆位
- ② 正位
- ③ 逆位
- ④ 横位
- ⑤ 正位
- ⑥ 正位

- 1: 黑褐色土
- 2: 暗褐色土



0 10cm



0 5cm

0 5cm

第6图 白ヶ原南遺跡 3・6・7・9号竪穴住居址、2・6・7号竪穴住居址出土土器・石器

土は2層に大別でき焼土も認められた。ピットは4基検出した。周溝は北側を除きほぼまわっている。炉の東脇からは深鉢が逆位の状態で出土した。口縁部が床面に密着するものであり、宮坂光昭氏のいうところの伏甕の状態であった。

遺物は少なく、土器は、第6図1が伏甕に使われていた深鉢で、中期後葉である。

石器は、第6図5の黒曜石製の石鏃等がある。

3号竪穴住居址 (第6図)

CC-51グリッドに位置する。平成10年度のトレンチ調査によってその存在が知られていた竪穴住居址である。III層上面で検出した。石田炉が完存していただけで、炉以外の痕跡を認めることはできなかった。炉は自然石5点を用いて構築してある。焼土と灰は認められなかった。

本址に伴う遺物は認められなかった。

6号竪穴住居址 (第6図)

CU-46グリッドに位置する。斜面上のII層中(黒褐色土)に構築されていたこともあり、検出作業は困難を極め、石田炉を検出したただけである。炉石は被熱を受けたためか大変もろく、とりわけ北辺のものは複数に割れ、すでに原形をとどめていなかった。接合できたことにより1枚の平板石であったことが理解できた。図示できなかったが、炉の周辺には比較的大きな自然礫が散乱していた。これらは本址に伴っていた可能性が大いだが、性格など詳しいことは一切不明である。また、炉の周辺から土器片が少なからず認められている。ここでは本址に所属するものと理解しておきたい。

遺物は少なく、土器は、第6図2・3の深鉢2点で、中期末葉である。

石器は、第6図6の片岩製の打製石斧は炉内からの出土である。

7号竪穴住居址 (第6図)

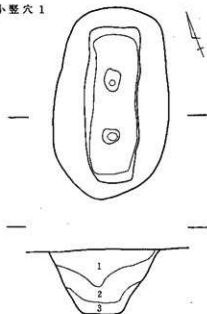
CG-46グリッドに位置する。II層中(黒褐色土)に構築されていた上に、平安時代の5号竪穴住居址と重複していたこともあり、その破壊は著しく埋甕炉を検出したただけであり、詳しいことは一切不明である。埋甕炉の在り方は注目できるものがある。それは同一個体の破片6点を、正位と逆位(1点のみ横位)というように交互に組み合わせてあった。残念なことに現場では1点だけその方向を明確にできなかった。炉内の覆土は①粒子の細かい黒褐色土、②しまりの良い暗褐色土の2層に大別できた。

遺物は少なく、土器は、第6図4の炉体土器だけで、中期中葉である。

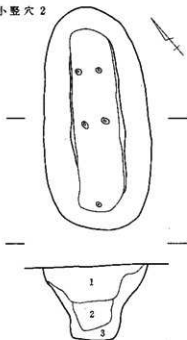
9号竪穴住居址 (第6図)

CW-47グリッドに位置する。III層上面で検出した。南斜面に位置するため、南側の壁はすで

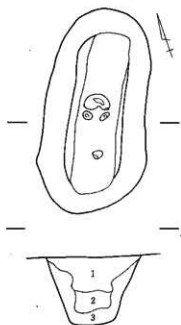
小竪穴 1



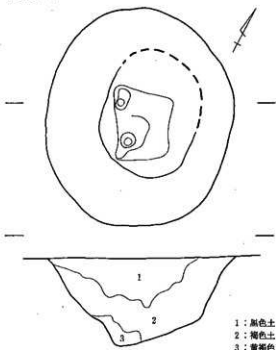
小竪穴 2



小竪穴 3



小竪穴 4



1 : 黒色土
 2 : 褐色土
 3 : 黄褐色土

0 1m

第7図 白ヶ原南遺跡 小竪穴 1~4

に流失していたが、径2.5m程の円形を呈するものである。炉は中央北壁際に、大形の石囲炉が完存し、炉底には焼土が認められた。ピットは北壁際に1基みられた。

遺物は極めて少なく、図示しうるものはみられなかったが、両耳壺の破片が出土していることから中期後葉である。

② 小 竪 穴

小 竪 穴 1 (第7図)

径205×120cm程の楕円形を呈し、深さは70cmを測る。底部には2ケの小ピットが認められる。形態からすれば陥し穴と考えられよう。覆土は3層に分けられる。

小 竪 穴 2 (第7図)

径238×110cm程の楕円形を呈し、深さは80cmを測る。底部には5ケの小ピットが認められる。形態からすれば陥し穴と考えられよう。覆土は3層に分けられる。平安時代の土器片が僅かに出土したが、混入品である可能性が高い。

小 竪 穴 3 (第7図)

径220×105cm程の楕円形を呈し、深さは73cmを測る。底部には5ケの小ピットが認められる。形態からすれば陥し穴と考えられよう。覆土は3層に分けられる。平安時代の土器片が僅かに出土したが、混入品である可能性が高い。

さて、小竪穴1～3はいずれも陥し穴と理解できる。時期決定資料にとほしく、また底部ピットの断ち割りも実施していないため、時期決定の決め手はないが、中世末～近世初頭頃に帰属する南平遺跡(平成9年度調査)のB型陥し穴とは形態的に異なるため、当該期ではないであろう。ここでは縄文時代の所産であると考えておきたい。

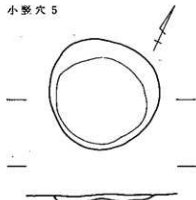
小 竪 穴 4 (第7図)

径230×195cm程のやや不整な円形を呈し、深さは93cmを測る。覆土は3層に分けられる。遺物は出土していない。性格等は不明である。

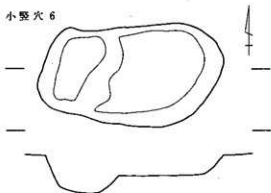
小 竪 穴 5 (第8図)

径115cm程のやや不整な円形を呈し、深さは8cmを測るにすぎない。覆土は単層である。遺物は出土していない。性格等は不明である。

小竪穴 5



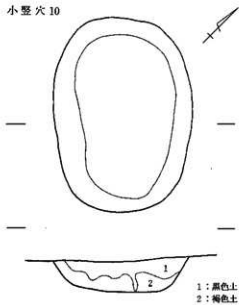
小竪穴 6



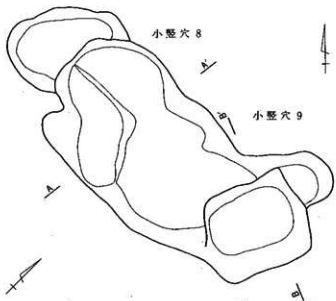
小竪穴 7



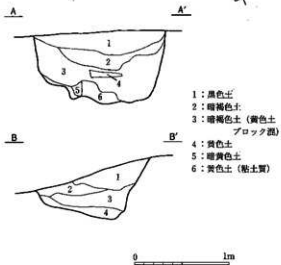
小竪穴 10



小竪穴 8



小竪穴 9



第8図 白ヶ原南遺跡 小竪穴 5～10

小竪穴 6 (第8図)

径190×110cm程のやや不整な楕円形を呈し、深さは最深部で40cm程を測る。覆土は3層に分けられる。遺物は出土していない。性格等は不明である。

小竪穴 7 (第8図)

径105×75cm程のやや不整な楕円形を呈し、深さは30cm程を測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。性格等は不明である。

小竪穴 8・9 (第8図)

小竪穴8と小竪穴9とは重複しており、小竪穴9の方が新しい。

小竪穴8は小竪穴9の一部を切られているが、径130×90cm程の楕円形を呈するものと推定できる。深さは残存部で65cmを測る。覆土は4層に分けられる。

小竪穴9は径320×150cm程の不整な楕円形を呈し、深さは80cmを測る。覆土は6層に分けられる。いずれからも遺物は出土しておらず、性格等は不明である。

小竪穴 10 (第8図)

径205×145cm程の楕円形を呈し、深さは35cm程を測る。覆土は2層に分けられる。遺物は出土していない。性格等は不明である。

③ 集 石

集石 1 (第9図・第17図)

平成10年度に調査したものである。径160cm程の範囲にわたって拳大から人頭大程の礫が集中していた。約50cm程の掘り込みも確認できた。集石を構成する礫の中に、第16図20に示した右側面と裏面に磨りの見られる安山岩製の磨石1点、図示しなかったがやはり安山岩製の敲石と凹石が各1点含まれていた。

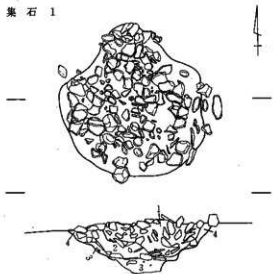
集石 2 (第9図)

DA-43グリッドに位置する。II層中(黒褐色土)に構築されていた。約80×60cm程の範囲にひろがる焼土と一体となって人頭大程の礫が数点認められた。掘り込みは認められなかった。遺物の出土はない。

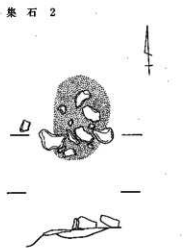
集石 3 (第9図)

CK-42グリッドに位置する。II層中に構築されていた。径140cm程の範囲にわたって拳大から

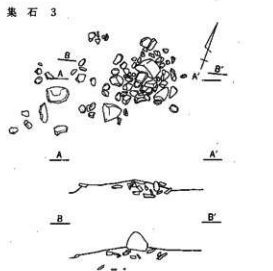
集石 1



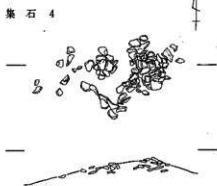
集石 2



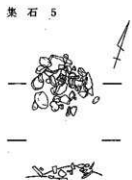
集石 3



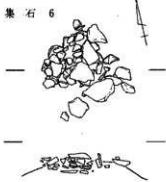
集石 4



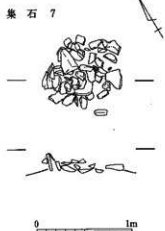
集石 5



集石 6



集石 7



0 1m

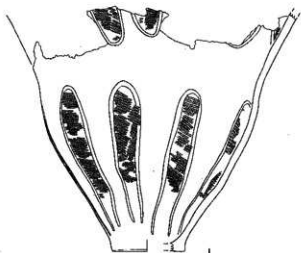
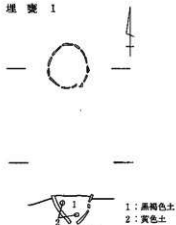
第9図 白ヶ原南遺跡 集石1~7

人頭大程の礫が集中していた。掘り込みは認められなかった。集石を構成する礫の中に、図示しなかったが安山岩製の敲石とおぼしき使用痕が認められるもの1点がある。

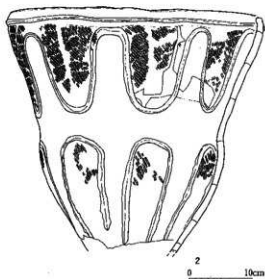
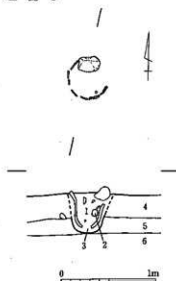
集石 4 (第9図)

CS-38グリッドに位置する。II層中に構築されていた。径100cm程の範囲にわたって拳大から人頭大程の礫が集中していた。掘り込みは認められなかった。遺物の出土はない。

埋 壙 1



埋 壙 2



第10図 白ヶ原南遺跡 埋壙1・2、埋設土器

集石 5 (第9図)

CJ-47グリッドに位置する。II層中に構築されていた。径60cm程の範囲にわたって拳大から人頭大程の礫が集中していた。掘り込みは認められなかった。集石を構成する礫の中に、図示しなかったが、明瞭に凹部は形成されていないものの、凹石としての機能をもつ安山岩の礫1点がある。

集石 6 (第9図)

BR-44グリッドに位置する。II層中に構築されていた。径100cm程の範囲にわたって拳大から人頭大程の礫が集中していた。掘り込みは認められなかった。遺物の出土はない。

集石 7 (第9図)

BW-43グリッドに位置する。II層中に構築されていた。径80cm程の範囲にわたって拳大から人頭大程の礫が集中していた。掘り込みは認められなかった。集石を構成する礫の中に、図示しなかったが安山岩製の凹石1点がある。

④ 埋 壘

埋 壘 1 (第10図)

CT-41グリッドに位置する。II層中(黒褐色土)で検出したものである。中期末葉の深鉢が正位に埋設されていたが、第10図1に示したように口縁部と底部を欠いていた。

埋 壘 2 (第10図)

CQ-43グリッドに位置する。II層中で検出したものである。中期末葉の深鉢が正位に埋設されていたが、第10図2に示したように底部を欠いていた。

⑤ 遺構外出土遺物

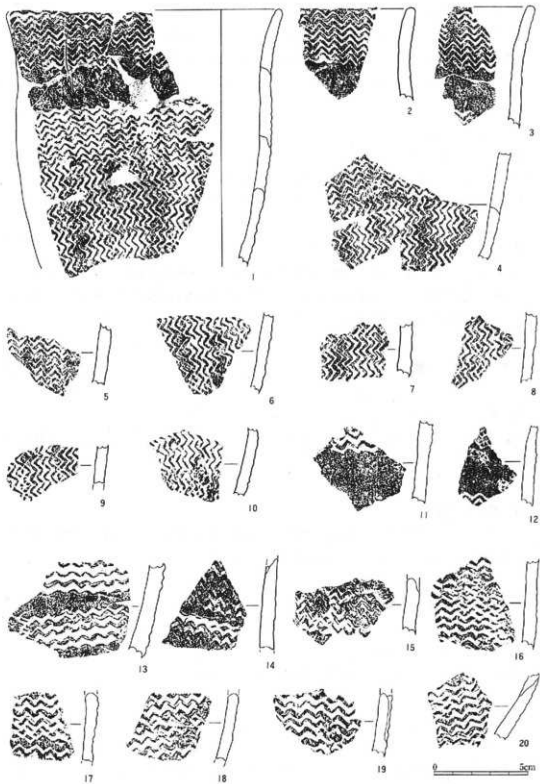
土 器 (第11図～第15図)

土器は早期の押型文および中期前葉～後期初頭にわたっている。

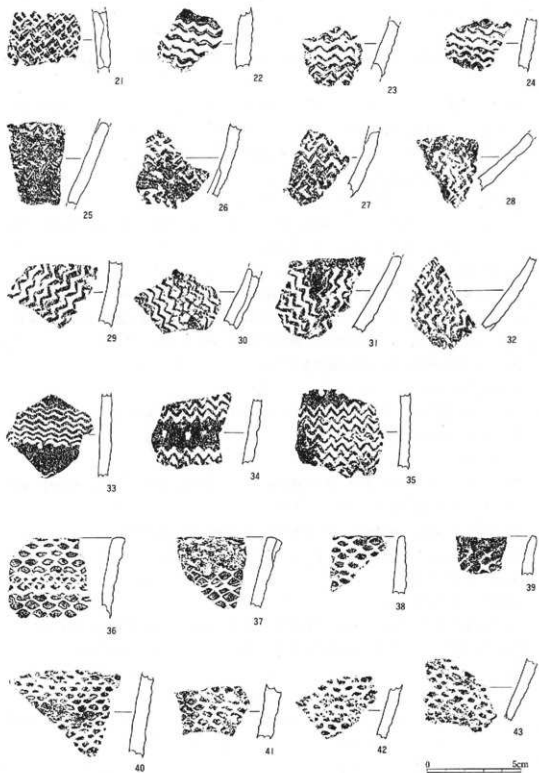
早期の土器

押型文系土器

押型文土器の総数は、細片を含めて122片出土している。文様は山形文と楕円文のみであり、内訳は山形文67片、楕円文55片である。山形文が56%とやや多いが、全点数が少ないので文様の



第11圖 白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影 1



第12図 白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影 2

占める割合でどちらが多いかということは、たいして意味をもたないであろう。

山形文

白ヶ原南遺跡の山形文は非常に特徴的であり、接合した破片から注目すべき文様構成を復原することができた。

第11図1～10は同一個体片で、1は9片の接合で器形を図上復原できた。山形文は普通の山形であるが、やや大きな山形で、8条の刻みがあり、原体の長さは31mmと大きい。文様構成は口縁部横位帯状以下縦位密接の、すなわち異方向密接構成である点が注目される。2・3は1の口縁部、4は頸部、5～10は胴部の破片である。

11・12は、おそらく1と同じ個体の破片と思われる。

13は樋沢タイプに一般的な小ぶりの山形である。3条の刻みで原体は短い。横位帯状施文の破片であるが、部位から見て帯状構成である可能性が高い。

14～20・第12図21～25は横位密接施文であろうか。

26～28は横位・縦位異方向施文であるが、口縁部の横位施文がどういう構成をとるかはわからない。26は縦位施文のときと若干の無文帯を残す構成かもしれない。樋沢遺跡平成10年度調査の出土品にまともに見られる構成である。28は底部近くの破片である。

29～32も同様に底部に近い破片で縦位施文である。

32は横位帯状施文。

34・35は横位帯状施文の無文帯に、丸い刺突文を施す異種文様並列構成である。山形文と刺突文の組み合わせはあまり例がない。

楕円文

楕円文の在り方も特徴的である。樋沢・細久保タイプの場合は、穀粒状の小さい楕円が一般的であるが、ここでは粒の平たく大きいものが多い。

36～39は口縁部破片の横位施文、36は密接施文で37・39は大きい楕円である。

40～43・第13図44～49も横位施文であるが、46は帯状施文であるかもしれない。48・49は重複施文のように見えるがはっきりしない。

50は横位・縦位密接施文。

51～58は縦位施文である。51・52は口縁部破片であるが、縦位密接構成であると思われる。いずれも大粒の楕円である。54・55は同一個体片で、粒が大きく見えるが押捺が弱いということもある。

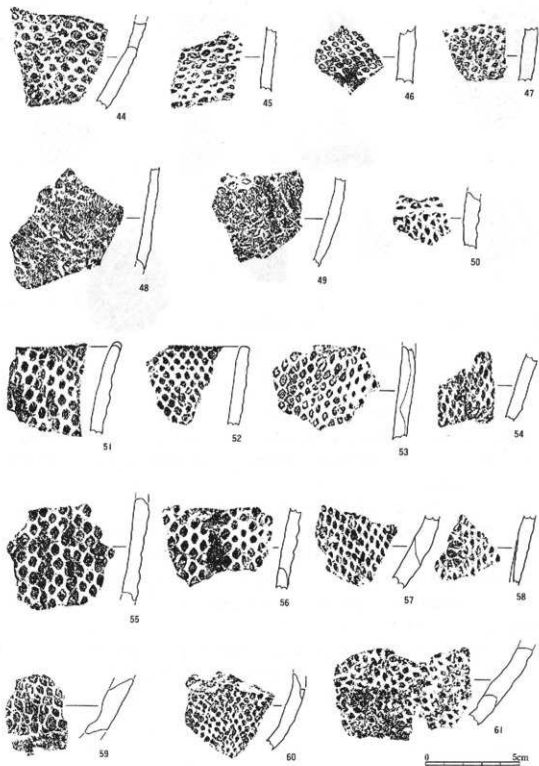
59～61は底部近くの破片のため施文が乱れている。

第14図62～65は横位帯状施文であり、62・63はまるい刺突文を無文帯にもつ異種文様並列構成。

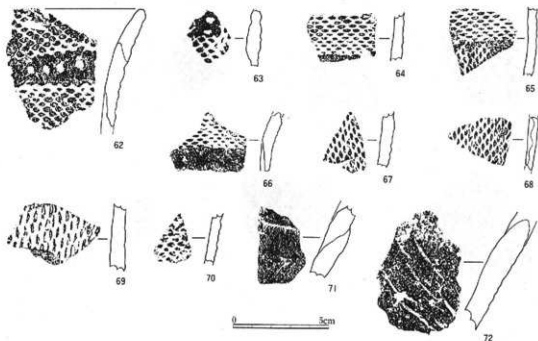
66は異方向密接、67・68は縦位施文。

69は楕円の粒が扁楕円形値のもの。

なお、押型文系土器に伴う無文土器は2片が出土している(71・72)が、沈線文土器は全くな



第13図 白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影3



第14図 白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影4

い。71・72の斜めの沈線は整形痕と見られる。

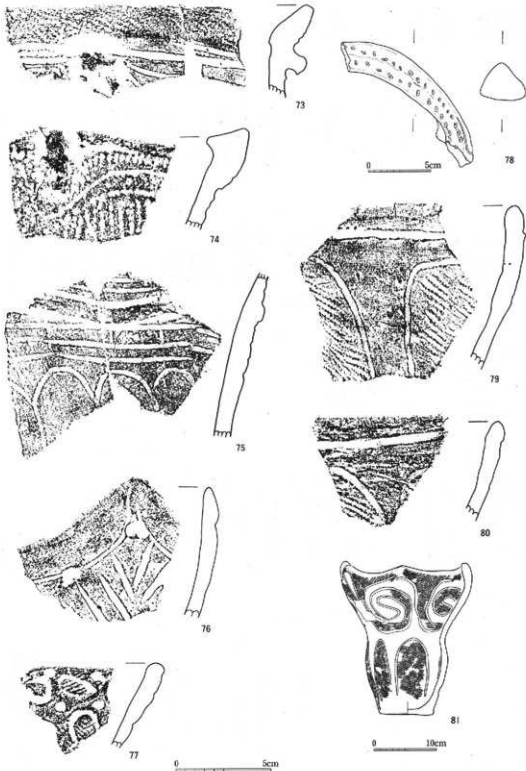
以上、山形文と楕円文を概観したが、前述の通り、山形文においては異方向密接（口縁部横位帯状以下縦位密接）構成が1個体ながらまとまって存在し、かつ、山形文がやや大ぶりて原体が長いという特徴をもつ。楕円文は横位帯状はほとんど無いこと、縦位密接構成が認められ、粒が大粒であることが特徴的である。

このような山形文と楕円文の在り方は、従来の樋沢・細久保タイプにはあまり見られない特徴である。異方向密接構成は立野タイプの特徴であるが、ここでは格子目文や網目文（ネガティブ楕円文）が一切出土していないことや、山形文の形は樋沢タイプのものであることから、白ヶ原南遺跡の一群が樋沢・細久保タイプであることに問題はない。最近の例としては、樋沢遺跡で指摘されている口縁部横位帯状以下縦位密接施文の山形文と極めて近い一群である。樋沢では楕円文も同じような在り方をしている。

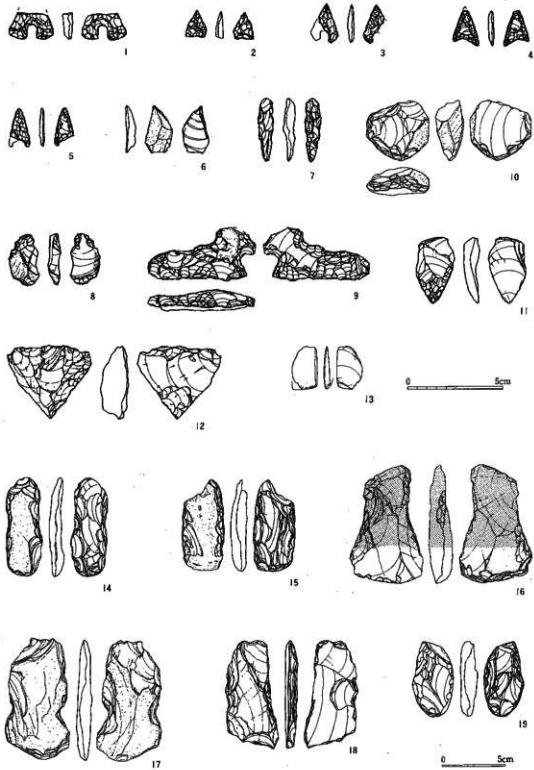
このことから、白ヶ原南遺跡の押型文土器は、樋沢遺跡に極めて近い段階にあるといえる。しかも、非常に単純な在り方をしていることと、楕円文がほぼ同じ割合で存在することなどから、むしろ樋沢におけるこのタイプの存在を裏付ける良好な資料として、今後注意されなくてはならないであろう。

中期～後期の土器

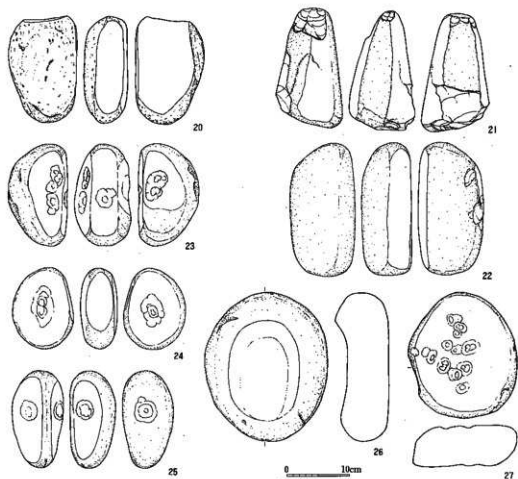
整理箱5箱ほどの土器が出土しているが、9点を図示しただけである。第15図73と75は中期初



第15図 白ヶ原南遺跡 遺構外出土土器 拓影5



第16図 白ヶ原南遺跡 遺構外出土石器



第17図 白ヶ原南遺跡 集石1・遺構外出土石器

頭の深鉢で、73は口縁部、75は胴部。74は中期中葉の深鉢の口縁部の破片である。76~81は中期最末から後期初頭で、76・77・79・80の4点は深鉢の口縁部の破片、78は該期にしばしば見られる釣手深鉢の釣手部の破片である。81は完形の優品である。このほか図示しなかったが中期後葉の土器もある。

石 器 (第16図・第17図)

全ての石器を図示することはできなかったが、出土数と石材を記したい。石鏃は12点出土したが第16図1~6の6点を図示した。全て黒曜石製である。7は石錐でやはり黒曜石製である。10と11の2点は削器で、10は砂岩製、11は珪岩製である。石匙は4点あり8と9の黒曜石製の2点を図示した。12は尖頭器で黒曜石製。13の磨製石斧は緑色岩製である。打製石斧は22点あり14~19の6点を図示した。14は砂岩製、15と17は輝緑凝灰岩製、18は雲母片岩製、19は緑色岩製である。特殊磨石は7点出土したが第17図21・22の2点を、凹石は13点出土したが23~25の3点

を図示しただけである。全て当地方で産出する安山岩製である。26の石皿、27の蜂の巣石もやはり当地方で産出する安山岩製で、蜂の巣石は磨り痕が認められることから石皿の機能を持ち合わせていたのかもしれない。この他スクレイパー4点、磨石8点等がある。

(2) 平安時代

発見した遺構は、竪穴住居址4軒、焼土址4である。

① 竪穴住居址

4号竪穴住居址 (第18図・第19図)

CD-47グリッドに位置する。III層上面で検出した。南斜面に位置するため、南側の壁は流失していたが、東西2.8mを測る。カマドは北壁ほぼ中央に存在する。ピットは検出できなかった。遺物は少なく、第19図1～3の3点は土師器坏で、10世紀代である。

5号竪穴住居址 (第18図・第19図)

CF-46グリッドに位置する。II層中(黒褐色土)で検出したため、平面プランを明確にできなかったが、カマドの存在、西側で床面と思われる硬化面と周溝を認めたことから竪穴住居址と判断した。カマドが北東隅に存在していたと想定すれば、その規模は3.8×3.3m程であり、隅丸方形を呈していたものと考えられる。カマドの遺存状態は比較的良好で、西脇からは土器が相当数出土した。ピットは検出できなかった。

遺物は多く、第19図4～13の10点は土師器坏、15・16の2点は壺で、2点ともロクロ成形ではない。14は灰釉陶器の碗で、10世紀代である。なお、図示できなかったが鉄製品がある。

8号竪穴住居址 (第18図)

CP-48グリッドに位置する。II層中で検出したが、不明瞭な点が多く、カマドと炭化材および焼土の存在から竪穴住居址と判断した。カマドは袖石が残存しただけで、破壊の度合いは強い。遺物を発見するまでに至らなかった。

② 焼土址

CL-47～CM-45グリッドにかけて3か所の焼土のひろがり認められた。II層中(黒褐色土)での検出で、いずれも平安時代の遺物および礫を伴っている。土器は住居址と同じ10世紀代であり、性格を明確にすることができず、竪穴住居址の痕跡である可能性を捨てることができな

4号住



A

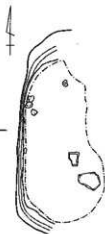
A'

B

B'

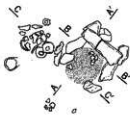


5号住



粘床

7号住埋藏物



A

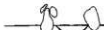
A'

B

B'

C

C'



8号住



A'

A

A'

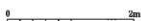
B'

B

B'

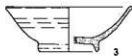
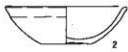
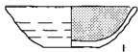
B

B'

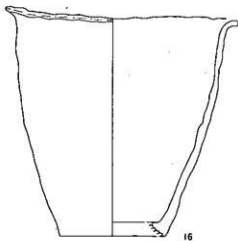
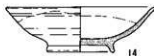
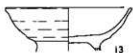
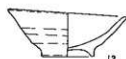
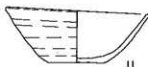
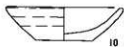
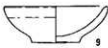
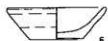
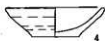


第18图 白ヶ原南遺跡 4・5・8号竪穴住居址

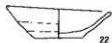
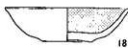
4号住



5号住



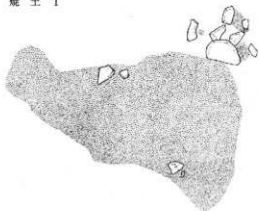
遺構外



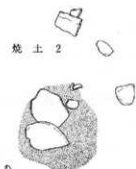
0 10cm

第19図 白ヶ原南遺跡 4・5号竪穴住居址、遺構外出土土器

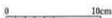
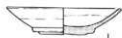
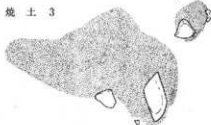
烧土 1



烧土 2



烧土 3



第20图 白ヶ原南遺跡 烧土1~3、烧土1出土土器

ったため、これらを焼土址として報告しておきたい。

焼土址 1 (第20図)

約3×2m程の範囲にひろがっており、拳大から人頭大程の礫も伴っている。

遺物は少ないが、第20図3は土師器の甕、1は灰釉陶器の皿2は碗である。

焼土址 2 (第20図)

約0.8m程の範囲にひろがっており、やや扁平な大ぶりの礫が伴っている。

焼土址 3 (第20図)

約2×1m程の範囲にひろがっており、2点ではあるがやや大ぶりの礫を伴っている。平安時代の土器の出土は少ない。

③ 遺構外出土遺物 (第19図)

10世紀代を中心とする土師器・須恵器・灰釉陶器が少なからず出土している。第19図18・19・21・22の4点は土師器の坏、17の灰釉陶器の皿、20の碗等がある。

2 ま と め

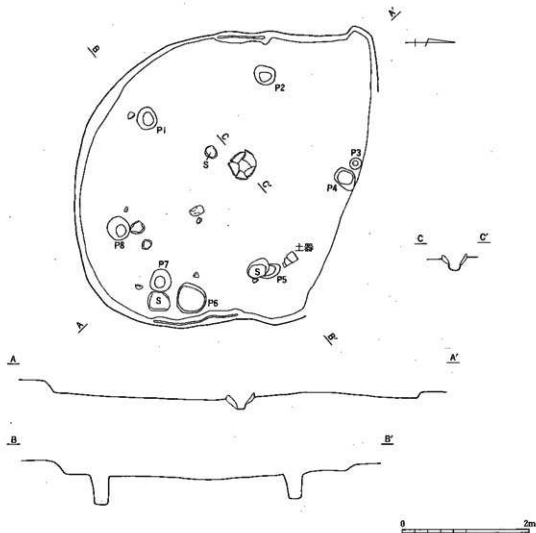
本遺跡は、非常に幅の狭い、いわゆる瘦せ尾根に立地しており、従来の原村の遺跡立地からははずれるものであったが、2か年にわたる発掘調査の結果、縄文時代および平安時代の人々が生活した痕跡がはっきり認められた。まず縄文時代には遺構を検出するまでには至らなかったが、早期押型文土器の良好な資料を得ることができた。続いて中期には竪穴住居址6軒と埋甕2基が設けられている。集石と小竪穴の多くも縄文時代の所産である可能性が高い。平安時代には3軒の竪穴住居址が認められる。このように従来の見解とは大きく異なる知見を得ることができたといえよう。またとりわけ平安時代には近接する阿久遺跡とは同一の集落を形成していた可能性も高いのではなからうか。今後の課題としたい。

IV 前沢遺跡

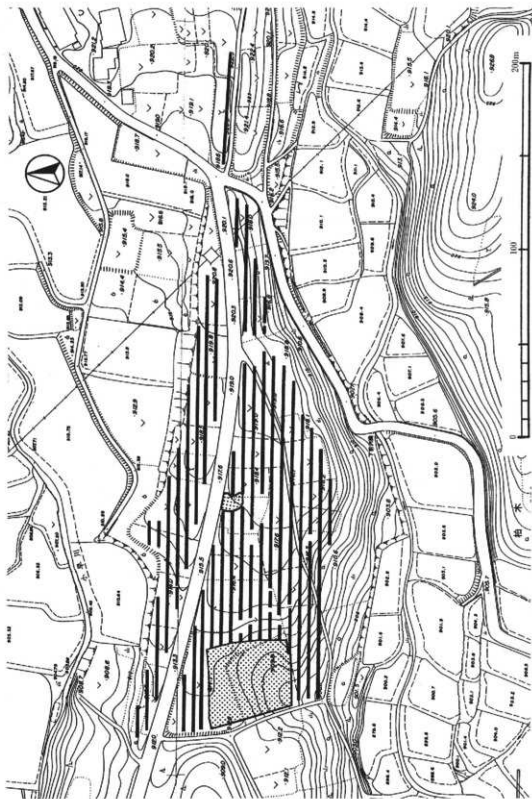
1 発見した遺構と遺物

(1) 縄文時代

発見した遺構は、竪穴住居址1軒、小竪穴1基である。遺構の番号は今までの続き番号とした。したがって住居址は3号竪穴住居址、小竪穴は小竪穴4になる。



第22図 前沢遺跡 3号竪穴住居址

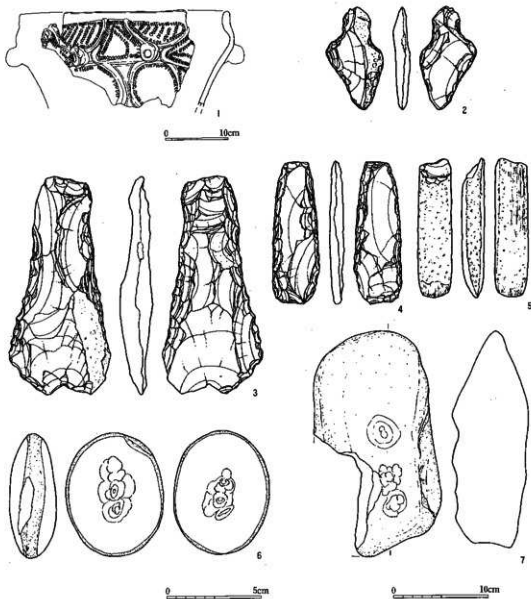


第21図 前沢道跡 発掘調査区域・地形図及び全体図

① 竪穴住居址

3号竪穴住居址 (第22図・第23図)

尾根のほぼ中央に位置する。III層上面で検出した。径4.5m程の不整な円形を呈する。覆土は黒褐色土の単層である。ほぼ中央に石囲炉が構築されていたが、焼土と灰は認められなかった。ピットは8基検出した。周溝は東側の一部にみられただけである。自然礫数点が床面よりやや浮



第23図 前沢遺跡 3号竪穴住居址出土土器・石器

いた状態で散乱していたが、性格等は不明である。

遺物は少なく、土器は、第23図1の口縁部破片を図示したが、中期中葉である。

石器は、第23図2の砂岩製の粗製石匙、5の緑泥片岩製の磨製石斧は基部を欠損している。3・4の2点は打製石斧で、3は玄武岩製で刃部を欠損し、4は緑色岩製である。6・7の2点は凹石で、当地方で産出する安山岩製である。6の表裏面には磨り痕がみられ、7は欠損品である。この他に図示しなかったが楔形石器等がある。

② 小 壜 穴

小 壜 穴 4 (第24図・第25図)

EI-42グリッドに位置する。III層上面で検出した。径130cm程のやや不整な円形を呈し、深さは最深部で35cm程を計る。性格等は不明である。

遺物は少なく、土器は、4点の破片が出土しただけである。第25図1の1点を図示しただけであるが中期中葉である。

石器は、打製石斧の破片があるが図示しなかった。

③ 遺構外出土遺物

土 器 (第25図・第26図)

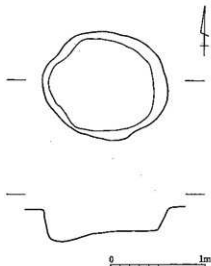
第25図2は早期は押型文土器である。

土器は、早期の押型文土器と中期初頭～中葉のものがあるがそれほど多くない。すべて遺跡南西のいわゆる日溜り(平安時代の住居跡が発見された地点)からの出土である。

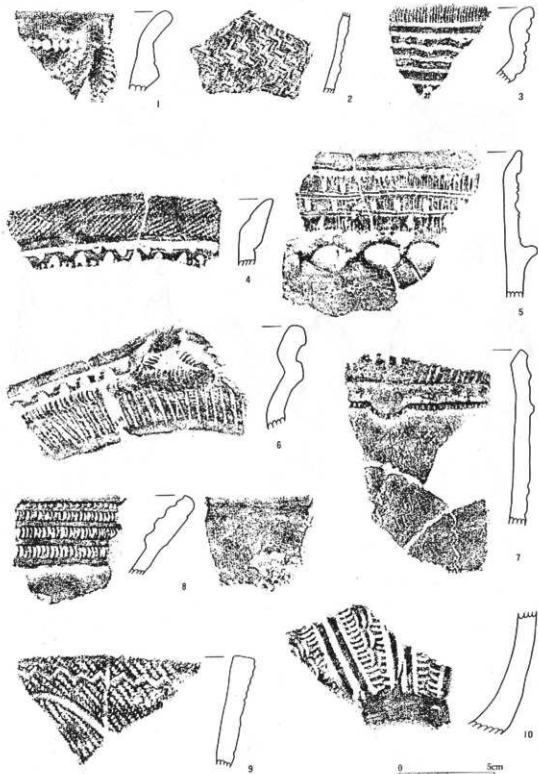
第24図2は早期は押型文土器である。3～10は中期初頭の口縁部片と底部片で、8は浅鉢である。中葉の土器は比較的まとまった第26図1・2の2点を図示した。出土状態は遺構が考えられる状況であったが、明確にするまでには至らなかった。

石 器 (第26図)

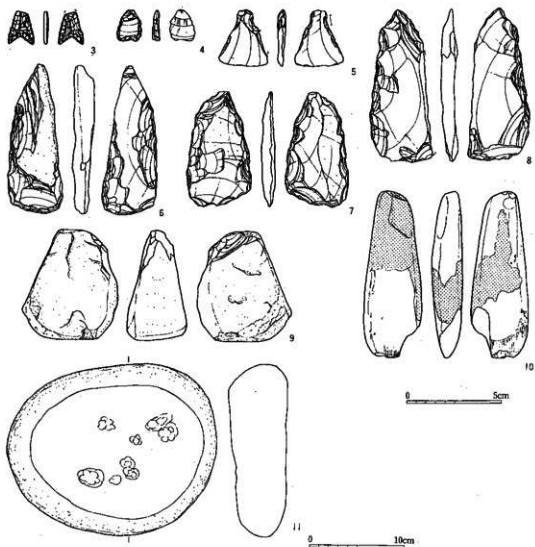
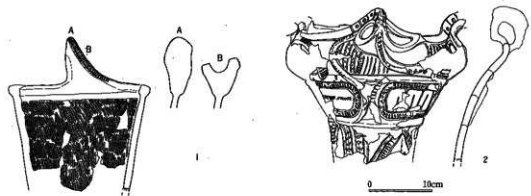
石器もやはり土器同様に遺跡の南西から出土したものが多。第26図3・4の石鎌2点と5の石匙は黒曜石製である。打製石斧は14点出土したが6・7



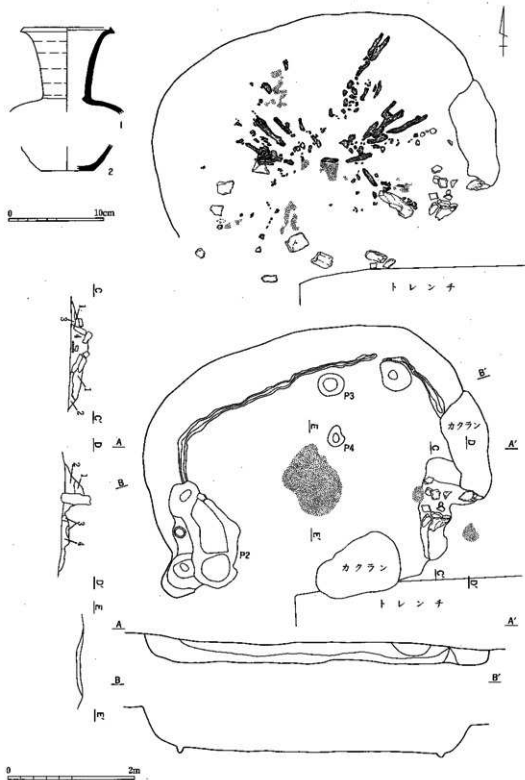
第24図 前沢遺跡 小壜穴4



第25图 前沢遺跡 小壜穴4、遺構外出土土器 拓影



第26圖 前沢遺跡 遺構外出土土器・石器



第27図 前沢遺跡 2号竪穴住居址、2号竪穴住居址出土土器

の片岩製と、8のホルンフェルス製の3点を、また敲石は6点出土したが9の細粒凝灰岩製の1点を図示しただけである。10の磨製石斧は緑泥片岩製で、被熱により破損が生じている。11の蜂の巣石は当地方で産出する安山岩製で、磨り痕が認められることから石皿の機能を持ち合わせていたかもしれない。この他図示しなかったがスクレイパー、楔形石器、凹石等もある。

(2) 平安時代

発見した遺構は、竪穴住居址1軒である。

① 竪穴住居址

2号竪穴住居址 (第27図)

BA-42グリッドに位置する。トレンチ調査でその存在が判明し、III層上面で検出した。南斜面に構築されていたため南壁はすでに流失していた上に、東壁は新しい攪乱で破壊されていた。そのため規模は推定の域をでないが東西5.2m程の隅丸方形を呈するものである。第27図でみるように炭化材の遺存状態は良好で焼失住居と考えられる。カマドは東壁に存在したが攪乱で一部破壊されている。床には8cm程の貼床が認められた。ピットは4基認められているが、P3とP4は貼床の下からの検出である。性格等については不明である。周溝はすでに流失していた両側を除き認められた。したがって全周していたものと思われる。ほぼ中央に地床炉を思わせる110×75cm程の焼土址が認められた。焼土は極めて厚く鍛冶関連の施設であろうと推察される。

遺物は小破片が多く、図示可能なものは2点にすぎない。第27図1は須恵器の長頸瓶である。口縁部から頸部にかけての部位。2は軟質須恵器の坏であり、9世紀後半頃である。

② 遺構外出土遺物

土器がごく少量出土しているが、図示しうるものはない。大半は2号竪穴住居址と同時期の9世紀後半頃である。

2 ま と め

今回で4回目の発掘調査となったわけだが、発見した遺構は竪穴住居址2軒(縄文時代中期1軒、平安時代1軒)、小竪穴1基にとどまった。過去3回の発掘調査においても縄文時代中期の竪穴住居址と小竪穴3基を発見したにすぎず、遺構密度の低い遺跡であることを追認することができた。また特筆すべきは2号竪穴住居址である。焼失住居であり、また何らかの鍛冶活動を行っていた可能性も高く、究明すべきことは多いが、今後の課題としておきたい。

V 阿久遺跡

1 発見した遺構と遺物

阿久遺跡は国史跡である。圃場整備事業はその指定範囲を取り囲む外縁部が対象であった。発掘調査の経過でも述べたように便宜的に、① 南斜面、② 北斜面、③ 中央自動車道西、という3地点に分けて調査を進めた。

調査の結果、発見した遺構と遺物のほとんどは① 南斜面からであり、② 北斜面では僅かな土器片が出土しただけであり、遺構を発見するまでに至らなかった。③ 中央自動車道西は、平成12年度に発掘調査を予定している地区であり、遺構の埋没状況を把握するためのトレンチ調査をしただけである。石組状の遺構と僅かな土器片と石器を発見している。

ここでは発見した遺構数を記しておくが、整理作業ははまだ遺物の洗浄を行っただけであり、作業が進むなかで訂正の可能性のあることを断っておきたい。

① 遺 構

縄文時代	竪穴住居址	5軒	埋 甕	2基	小竪穴 (輪し穴)	4基
平安時代	竪穴住居址	22軒				
時期不詳	小竪穴	30基				

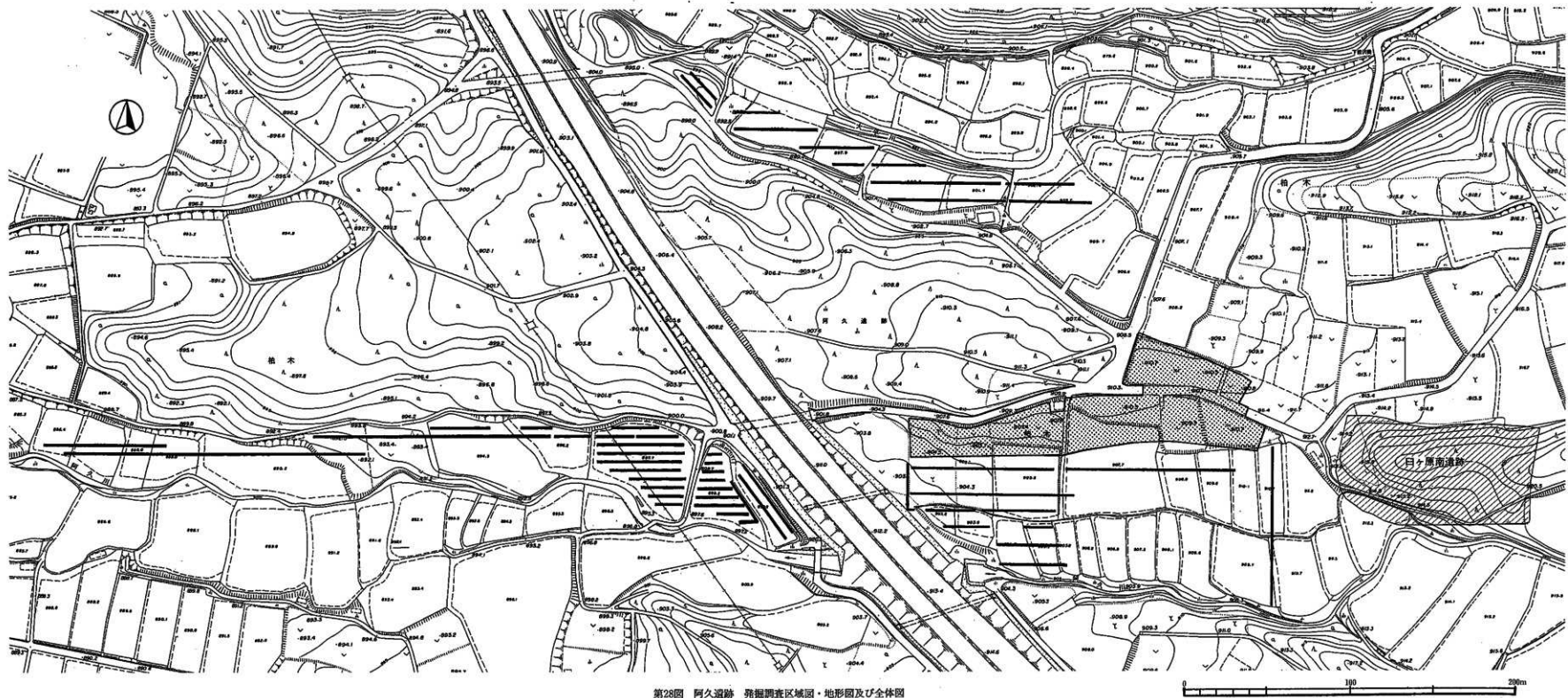
② 遺 物

縄文時代	土器、石器ほか
平安時代	土器、鉄製品、炭化材ほか

2 ま と め

当初の予想では国史跡内と同様に縄文時代前期の遺構と遺物が検出できるのではないかと考えていたが、実際に調査に入ってみると、南斜面には平安時代の住居址が22軒も認められ、平安時代(10世紀頃)の集落が姿を現わしてきた。これは正直いって驚きであった。しかも縄文時代の遺構と遺物も調査段階の所見では、中期後半期のものが大半を占めており、縄文前期については遺構は認められず、遺物もほとんど見いだせなかった。国史跡の外縁部ともいえる今回の調査地

域には「縄文前期の遺構がみられない」ことが判明したわけであり、この知見は阿久遺跡の性格を追求するうえで重要な資料になりうると考えられる。



第28图 阿久遺跡 発掘調査区域図・地形図及び全体図

VI 結 語

平成8年にはじまった「県営圃場整備事業原村西部地区」も4年目にあたり、国史跡阿久遺跡に隣接する地域がその対象となった。

当初から阿久遺跡を高台にすることは避けたい。と思う中で保護協議を行ってきたが、遺跡を取り巻く景観はあまりにも変わってしまった。遺跡から見えていた尾根は削平され、阿久川と大早川の沢は埋められてしまった。尾根が消えたことは遺跡が消滅したことであり、破壊され消えていった遺跡を十分に調査できただろうか。と考えさせられる。反省の意味を込め調査をふりかえり思いつくまを記しておきたい。

白ヶ原南遺跡

平成10年度のトレンチ調査で住居址の埋没を確認した遺跡である。馬の背状のやせ尾根に立地している。従来では考えられない地形であったが、縄文時代と平安時代の住居址を調査している。

縄文時代 当地方では発見例の少ない、早期および中期最末から後期初頭の資料が出土した。中でも早期は、住居址等の施設を確認するまでに至らなかったが、押型文土器が比較的多く出土し、該期の好資料であると思っている。

平安時代 やや狭い日溜まり地形で住居址を発見したが、発見した住居址だけの単独のムラとは考えにくく、後述の阿久遺跡と強い関係があったものと思われる。

前 沢 遺 跡

縄文時代と平安時代の住居址を発見したが、それぞれ1軒と少ない。

縄文時代 広範囲におよぶトレンチ調査を実施したが、中期中葉の住居址1軒を発見しただけである。遺物の発見は無いに等しく、手前味噌ではあるが住居址を見落とした可能性は極めて低いと思っている。平成2年度に調査した堤之尾根遺跡でも、やはり住居址1軒を発見しただけである。比較的大規模集落跡を想定しがちの該期であるが、このように1軒(少数)と少ない住居址のあり方にも注意しなければならないだろう。

平安時代 住居址は鍛冶施設を伴うものであり、1軒だけが存在していたとは考えにくく、日溜まり地形に展開する典型的な集落跡と考えられる。しかし、隣接する西側はすでに削平されておき確認する術はない残念である。

阿久遺跡

整理作業が進んでいないため、多くを述べることはできないが、やはり縄文時代と平安時代の住居址等を発見している。

縄文時代 発見した全ての住居址が中期であり、中央自動車道建設に先立って発見した前期とは時期が違っている。また、それらの発見場所は、尾根の外縁部にあたり他遺跡でみる条件と比べてみると悪いように思う。なぜこの場所を生活区域にしているのか、と考えさせられるものであった。

平安時代 中央自動車道建設に先立つ発掘調査の結果からみて、住居址の埋没は容易に考えられるものであったが、今は露呈した大規模集落に驚いている。整理作業を進めるなかで、その意義を明らかにしなければならないと思っている。

まとめることはできなかったが、発見した資料を今後の研究に役立てば幸いである。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

白ヶ原南遺跡出土押型文土器観察表

図版 No.	出土 ツリット	文 様	条 数	単 位	原 体 径	原 体 長	端 部	文 構	口 唇	胎 土	整 形 ・ 外	内 部 内	部 位	焼 成	備 考
1	CJ-47	山形2(2)	8	2	4.9	30.8	1(1)	横帯 縦密	2	2(3)	2	2	口~胴	良	1~10同一個体片か
2	CH-47	山形2(2)	8?	2	4.9	---	1(1)	横帯	2	2(3)	2	2	口縁	良	
3	CO-49	山形2	8	---	---	31.0	1(1)	横帯	2	2(3)	1	1	口~頸	良	
4	CO-49	山形2	6以上	---	---	---	---	横帯	---	2(3)	---	1	胴上部	良	接合
	CH-47	山形2	---	---	---	---	---	横帯	---	2(3)	---	1	胴上部	良	
5	CJ-48	山形2	---	---	---	---	---	横	---	2(1)	---	1	胴	良	
6	CK-49	山形2	---	---	---	---	---	縦密	---	2(3)	---	1	胴	良	
7	CK-49	山形2	---	---	---	---	---	縦密	---	2(3)	---	1	胴	良	
8	CJ-48	山形2	---	---	---	---	---	縦密	---	2(3)	---	1	胴	良	
9	CJ-49	山形2	---	---	---	---	---	縦密	---	2(3)	---	1	胴	良	
10	CK-49	山形2	---	---	---	---	---	縦密	---	2(3)	---	1	胴下部	良	
11	CH-	山形1	---	---	---	---	1(1)	横帯	---	2(2)	1	1	胴上部	良	11~12は1~10と同一個体片か
12	CL-47	山形1	---	---	---	---	2(1)	横帯	---	2(2)	1	1	頸	良	
13	CO-42	山形1(2)	3以上	2	5.2	---	1(1)	横帯	---	2(3)	1	1	胴	良	
14	CO-49	山形1	5以上	---	---	---	2(1)	横	---	2(3)	1	1	胴	良	
15	Z Z Z	山形2(2)	4以上	2	4.6	---	2(2)	横	---	2(3)	---	1	胴上部	良	
16	CM-43	山形1	---	---	---	---	---	横密	---	2(1)	---	2	胴	普	
17	CE-40	山形1	4以上	---	---	---	1(1)	横密	---	2(3)	---	2	胴	普	
18	CO-45	山形1	---	---	---	---	1(1)	横	---	2(3)	---	1	胴	良	
19	CK-42	山形1	---	---	---	---	---	横	---	2(1)	---	2	胴	良	
20	CK-44	山形1	---	---	---	---	---	横	---	2(1)	---	1	胴	良	
21	Z Z Z	山形	---	---	---	---	---	横	---	2(1)	---	2	胴	良	
22	CL-43	山形1	---	---	---	---	---	横	---	2(3)	---	1	胴	良	
23	CQ-48	山形1	---	---	---	---	---	横	---	2(2)	---	1	胴	良	
24	CH-47	山形1	---	---	---	---	---	横	---	2(2)	---	1	胴	良	
25	Z Z Z	山形1	---	---	---	---	---	横	---	2(1)	---	1	胴	良	施文浅い

図版 No.	出土 グリップ	文様	条数	単位	原体径	原体長	端部	文構	口唇	胎土	整形・外	整形・内	部位	焼成	備考
26	CO-45	山形1	—	—	—	—	—	横綫	—	2(1)	1	1 胴	良		
27	CO-40	山形1	—	—	—	—	—	横綫	—	2(3)	—	2 胴下部	良	類似口縁	
28	CS-49	山形1	—	—	—	—	—	—	—	2(1)	—	1 底部	良		
29	CP-39	山形1	—	—	—	—	—	縦	—	2(3)	—	1 胴	良		
30	CS-48	山形1	—	—	—	—	—	縦	—	2(1)	—	1 胴	良		
31	集石 3	山形1	—	—	—	—	—	縦	—	2(1)	—	1 胴下部・底 部近く	良		
32	CU-49	山形1	—	—	—	—	—	縦	—	2(1)	—	1 胴下部・底 部近く	普		
33	CJ-43	山形1(2)	7	2	4.6	23.0	1(2)	横帯	—	2(2)	2	1 胴	良		
34	CS-39	山形2	6以上	2	4.2	—	1(1)	並列	—	2(3)	2	2 胴	良	無文部の刺突あり	
35	CO-39	山形2	—	—	—	—	1(1)	並列	—	2(1)	1	2 胴	良	無文部の刺突あり	
36	CJ-45	楕円1b	4以上	2	5.4	—	1(2)	横密	2	3(2)	—	3 口縁	良		
37	CJ-49	楕円4b	—	—	—	—	—	横密	2	2(2)	—	3 口縁	良		
38	Z Z Z	楕円1b	—	—	—	—	2(2)	横	2	1(1)	—	3 口縁	良		
39	Z Z Z	楕円1b	4以上	2	5.4	—	1(2)	横	2	3(2)	—	2 口縁	良		
40	DB-52	楕円1a	—	—	—	—	3	横密	—	1(1)	—	3 胴	普		
41	Z Z Z	楕円1b	—	—	—	—	—	横	—	1(1)	—	1 胴	普		
42	Z Z Z	楕円1a	—	—	—	—	—	横密	—	3(2)	—	3 胴	普		
43	Z Z Z	楕円1a	—	—	—	—	—	横密	—	3(2)	—	3 胴	普		
44	CP-39	楕円2a	—	—	—	—	—	横密	—	1(1)	—	2 胴下部	良		
45	CX-51	楕円1a	—	—	—	—	—	横	—	1(3)	—	2 胴	普		
46	CL-12	楕円1a	8以上	—	—	—	1(2)	横(帯)	—	2(4)	—	3 胴	良		
47	Z Z Z	楕円2a	—	—	—	—	—	横密?	—	1(1)	—	2 胴	普		
48	CM-49	楕円1b	—	—	—	—	—	横密?	—	3(1)	—	3 胴	良		
49	CV-49	楕円1b+ 4b	—	—	—	—	—	横	—	1(1)	—	3 胴	良		
50	CK-45	楕円1b	—	—	—	—	—	横綫	—	1(1)	—	3 頸	良		
51	CT-38	楕円1b	—	—	—	—	—	横密	2	1(3)	—	3 口縁	良	55と同一個体	
52	CI-47	楕円2b	—	—	—	—	—	縦?	2	1(1)	—	3 口縁	良		

出版 No.	土 グリップ	文 様	条 数	単 位	原 体 径	原 体 長	端 部	文 構	口 唇	胎 土	整 形 ・ 外 形	整 形 ・ 内 形	部 位	焼 成	備 考	
53	CY-48	楕円1a	—	—	—	—	—	縦密	—	1(1)	—	3	胴	普		
54	CN-42	楕円1a	—	—	—	—	—	縦	—	1(1)	—	3	胴	普		
55	CM-43	楕円1b	—	—	—	—	—	縦密	—	1(3)	—	3	胴	良	51と同一胴体	
56	CH-41	楕円1b	—	—	—	—	—	縦密	—	3(2)	—	3	胴	良		
57	Z Z Z	楕円1a	—	—	—	—	—	縦密	—	1(1)	—	2	胴下部	普		
58	CE-40	楕円1b	—	—	—	—	—	縦	—	3(2)	—	2	胴	良		
59	CU-49	楕円4b	—	—	—	—	—	縦	—	3(2)	—	3	底近く	良	粘土積みあげの場所に 押型のあと残っている	
60	CL-48	楕円2b	—	—	—	—	—	—	—	1(3)	—	2	底近く	良		
61	Z Z Z CU-49	楕円1	—	—	—	—	—	—	—	1(1)	—	2	胴下部	普		
62	CR-41	楕円1a	7以上	—	—	—	2(2)	並列	2	3(3)	1	3	口〜頸	良	無文部に刺突あり	
63	Z Z Z	楕円1a	—	—	—	—	—	並列	—	3(2)	1	3	頸	良	無文部に刺突あり	
64	CR-43	楕円1a	—	—	—	—	4	横帯	—	2(1)	1	3	頸	良		
65	CP-43	楕円1a	10以上	—	—	—	4	横帯	—	1(1)	—	2	胴	良		
66	CM-48	楕円1a	9以上	—	—	—	4	横線	—	1(1)	—	2	胴	良		
67	兼石5	楕円1a	—	—	—	—	—	横密	—	2(4)	—	2	胴	良		
68	CS-49	楕円1a	—	—	—	—	—	横密	—	2(4)	—	2	胴	良		
69	CO-51	楕円3b	—	—	—	—	—	横密	—	1(1)	—	2	胴	普		
70	CS-39	山形十 楕円	—	—	—	—	—	横	—	2(4)	—	3	胴	良		
71	CM-49	無文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	整形痕(横痕)?	
72	CJ-44	無文?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

報告書抄録

ふりがな	うすつばらみなみ、まえざわ、あきゅういせき							
書名	白ヶ原南(第1・2次)、前沢(第4次)、阿久(第9次)遺跡							
副書名	平成10・11年度県営園場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	原村の埋蔵文化財							
シリーズ番号	52							
編著者名	櫻井 秀雄・会田 進・平出 一治・平林とし美							
編集機関	原村教育委員会							
所在地	〒391-0192 長野県諏訪郡原村12080 TEL 0266-79-7930							
発行年月日	西暦 2000年03月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白ヶ原南	長野県諏訪郡原村柏木	3637	101	35度 57分 37秒	138度 11分 46秒	19990401 19991126	6,611	平成11年度 県営園場整備 事業原村 西部地区
前沢			12	35度 57分 48秒	138度 11分 40秒		5,172	
阿久			11	35度 57分 37秒	138度 11分 38秒		9,845	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
白ヶ原南	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	4軒	早期・中期・後期 土器、打製石斧、 石匙、石皿等	平安時代の集落跡は 隣接する阿久遺跡の 集落と同一の可能性 が高く、集落研究上 の好資料である。		
		平安時代	竪穴住居跡	4軒				
前沢	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	1軒	早期・中期土器、 打製石斧、石匙等 土師器、灰釉陶器			
		平安時代	竪穴住居跡	1軒				
阿久	集落跡	時代不詳	小竪穴	1基				
			縄文時代	竪穴住居跡	5軒	中期土器、打製石 斧、石匙等		
		平安時代	竪穴住居跡	22軒	土師器、須恵器、 灰釉陶器			
時代不詳	小竪穴	30基						

原村の埋蔵文化財52

白ヶ原南・前沢・阿久遺跡
(第1・2次) (第4次) (第9次)

平成10・11年度県営圃場整備事業原村
西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成12年3月

発行 原村教育委員会
〒391-0192 長野県諏訪郡原村
TEL 0266-79-7930

印刷 もえぎ企画書籍
〒394-0043 岡谷市御倉町2-21
TEL 0266-22-4892



向ヶ丘公園

山二の峠

木舟

精明堂